

シェイクスピア『ハムレット』論 ——無垢な女性の表象——

日大生産工 ○福島 昇

シェイクスピアの忘れ難いヒロインたち、コーディーリア、デスデモーナ、イモージェン、ジュリエットなどそれぞれに個性的なヒロインたちに較べて、オフィーリアは非個性的であるのがひととき目立つ存在である。同じく純情可憐であるにしても、オフィーリアの場合、そのイノセンスは無垢を意味すると同時に無知、無力という印象を強く与える。父リアの愚かな問いに対し「言うことはなにも」（1幕1場）と決然といい放つコーディーリアとは全く正反対に、オフィーリアは俗悪な父（と兄）のいつけに唯唯諾諾と従って、ハムレットの真情をいたく傷つける。父の「操り人形」となってハムレットの狂気の正体をつきとめる役目をすら勤める。シェイクスピアは一体なぜにオフィーリアをこのように頼りない無知な女として描いたのか。ハムレットの孤立無縁の戦いの悲愴さをいっそう際立たせるためであるのか。常識的に考えれば、彼女はハムレットの恋人として、ホレーショーを除いてはこの城中で唯一人のハムレットの味方となり、彼を助けてその使命を果させるために全力をつくすのが至当である。しかし、シェイクスピアはオフィーリアにそのような役割を与えてはいない。それとは全く逆に、父の傀儡となって恋人の正体を探る愚かな女として描いている。そこではオフィーリアにおけるイノセンスは全く無知、無力を意味するにすぎないかの如く見える。果たしてオフィーリアはそれだけの女であるのだろうか。

ハムレットは母親の汚れに対する嫌悪感から、それを女性一般の弱さに見做し、オフィーリアも女としてその汚れを免れ難いと予想する。これはハムレットの偏見であり、弱さを問題にすれば女性に限らず男性もまた同じであることはローゼンクランツやギルデンスターンを持ち出すまでもないことである。オフィーリアはコーディーリアと対極をなす女であると同時に、この劇ではガートルードと対極をなす女である。ガートルードが汚れた女であるとするれば、オフィーリアは無垢の女としてこの劇の劇的効果を支えている。イノセンスは世の悪を知らず、ややもすれば悪に利用され、恋人を裏切る羽目におちいるけれども、同時にそれはまた己は無垢なるにもかかわらず、この世の悪の償いを一身に引き受けて苦しまねばならない。少なくともオフィーリアの狂気と死の場面はそのように意味づけることによって初めて感動的な場面となり、ハムレットの慟哭の深さを暗示することができる。以上のような立場からこの劇におけるオフィーリア像の本質、特にそのイノセンスの実体を究明せんとするのが本発表の目的である。

シェイクスピアの悲劇では最後のクライマックスを迎える前に必ずといっていいほど主人公が舞台から姿を消し、再び舞台にあらわれてときは以前とはかなり変貌している。それは、一つには最後のクライマックスの演技の前に主演俳優にしばらく休息を与えることが必要であったからであるが、シェイクスピアの天才はそういう演劇上の制約を逆に利用して、これまでとは視点を変えて悲劇の実体をより深くとらえ直すことに成功しているといえる。『リア王』では主人公のリアが不在であるのは3幕7場から4幕5場に至る400行余りであって、そこでは主として盲目のグロスターと気がい乞食のエドガーによって演じられる悲惨な生の姿が展開されるが、それはリアの悲惨な境涯と二重写しとなってわれわれを感動させる。「『いまがどん底』などと言えるあいだはほんとうのどん底ではないのだ」（4幕1場）というエドガーの傍白が鋭くわれわれの胸にくいこみ、リアの苦難の深淵をわれわれに垣間見させる。従ってリアが再びわれわれの前に姿をあらわす6場において、リアは完全に狂気となって登場する。かつて半狂乱であったリアはここで完全に狂気となる。その間のリアの苦悩はグロスターの苦悩を通してわれわれに生々しく伝わってくるのである。では『ハムレット』の場合はどうか。『ハムレット』におけるハムレット不在の場は4幕5場から7場に至るやはり400行余りである。そしてこのハムレット不在の場の中心はオフィーリアの狂乱と死である。勿論、そこには父の死の真相を求めてクローディアスを追求するレアティーズ、そのレアティーズをうまく利用してハムレット暗殺の計画を練るクローディアスという筋の展開上重要なやりとりがあるが、しかし演劇的效果という点ではオフィーリアの狂乱と死が最も重要なものである。シェイクスピアの悲劇の主人公不在の場の最もいちじるしい特徴は主人公がいなくても、観客は主人公を忘れ、別の人物や事件に気をとられるということではなく、いないことがいることに劣らずより強烈に主人公の存在をわれわれに印象づけるという所にある。このあと5幕に登場するハムレットはこれまでのハムレットとはかなりちがった

Representation of an Innocent Woman: Shakespeare's *Hamlet*

Noboru FUKUSHIMA

印象を与える。これまでのハムレットはウィリアム・ジェームズが

哀れな人間の全意識は悪の感情で満たされているため、ハムレットはこの世に善が存在するという意識を全く失っている。彼の心はそれを受けつけず、認めることもできない。太陽が彼の空から消えてしまったのだ (Knight 23)。

と述べているように、魂は病んでいた。……

清純無垢なオフィーリアが余りにも従順な少女であったが故に、父や兄のいつけに従い、ハムレットの愛を疑い、スパイの如き役割さえ果さなければならず、結局はハムレットから絶縁をいわたされ、「さ、行くのだ、尼寺へ」(3幕1場)とすすめられるけれども、そういういわば「操り人形」的な頼りない姿の中にこそオフィーリアの限りない美しさはあったのだ。俗悪な父や兄によって純愛をふみにじられ、利用され、恋人に愛想をつかさされるオフィーリアのイノセンスにこそ彼女の独自性があり、シェイクスピアはそういうオフィーリアこそハムレットに最も相応しい恋人として造型したのであり、それはそういう殆ど無知ともいべき無垢によってこそ初めてハムレットの罪は贖われると考えたからであろう。だから狂気のオフィーリアは単に哀れな狂女ではない。国王や王妃の罪の真相を鋭く見抜いて反省をうながす明敏さを備えている。彼女はこの腐敗と悪徳と犯罪と破廉恥のデンマークに生きるべく余りにもイノセントな女であった。その意味では彼女が女として、母ガートルードの血縁としての汚染を免れ難いとハムレットは危惧したけれども、じつはオフィーリアこそがガートルードとはまさに対極をなす女であったといえるのだ。ハムレットが女を十把ひとからげにして「心弱きもの、おまえの名は女！」(1幕2場)と嘆くけれども、弱い者は女だけではあるまい。この劇に登場する人物たちはハムレットとその友ホレーショーを除いてはすべて弱い人間たちであるのではないか。しかも、ホレーショーが強いのは彼が「見ている人」に終始しているからにすぎないのではないか。ここには『リア王』におけるコーディーリアやケントやエドガーのような強い人物はいない。従って、ハムレットは殆ど独力で周囲のすべての人を敵として闘わねばならない。そのような戦いの帰趨は自ずから明らかである。贖いとしてのオフィーリア、それは一人恋人ハムレットの罪を贖うのではない。父や兄の罪を、国王や王妃の罪までもおそらく一身に引き受けてオフィーリアは狂死したのだということは余りにもいいすぎになるであろうか。少なくとも、私はそうとらえることによって初めてシェイクスピアのオフィーリア造形の意味を理解し得るのである。

#### 引証資料

\* 本発表は小論「オフィーリアにおけるイノセンス」『英文学論叢』第32号(日本大学英文学会、1984)に一部基づいている。

1 Bradley, A. C. *Shakespearean Tragedy*. London: Macmillan, 1904.

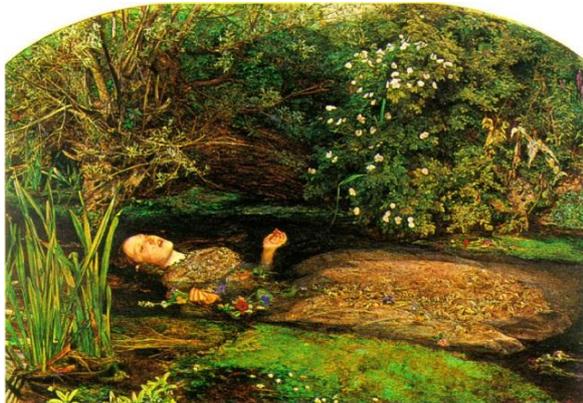
2 Knight, Wilson. *The Wheel of Fire*. London: Methuen, 1949.

3 Muir, Kenneth, ed, *King Lear*. Arden Shakespeare, London: Methuen & Co Ltd, 1901.

4 Thompson, Ann, and Neil Taylor, eds. *Hamlet*. Arden Shakespeare, 3<sup>rd</sup> Series. London: Cengage Learning, 2006.

5 W. N. King. *Hamlet's Search for Meaning*. Athens: The University of Georgia Press, 1982.

6 Wilson, John Dover. *What Happens in Hamlet*. Cambridge: CUP, 1935.



(左) ジョン・エヴァレット・ミレー『オフィーリア』テート・ギャラリー(ロンドン)、1851-52年。  
(右) 野村萬斎のハムレットと中村芝のぶのオフィーリア『ハムレット』世田谷パブリックシアター、2003年